近代水産の父 書簡見つかる

館山・小谷家に伝習所長としてお礼

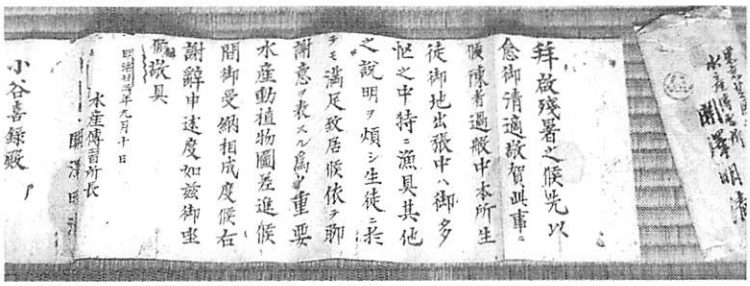
21日に展示

夭折した画家・青木繁が滞在した館山市布良の小谷家で、「近代水産業の父」とされる関沢明清の手紙が見つかった。小谷家に伝わる「日本重要水産動植物之図」は関沢の贈ったものと判明。当主の小谷福哲さん(61)は「青木繁もこの図を見たはず」という。

小谷家には、東京美術学校(現在の東京芸大)を卒業した青木繁や恋人の福田たね、同郷の画家、坂本繁二郎らが1904年7月中旬から8月末まで暮らした部屋がそのまま残る。市の有形文化財に指定され、NPO法人安房文化遺産フォーラム(愛沢伸雄代表)が見学会を開いている。

手紙は今年7月の見学会で見つかった。小谷福哲さんが居間の押し入れの奥にあった木箱から手紙を見つけた。「水産伝習所長　関沢明清」の手紙は1890年9月10日付、小谷喜録あて。「生徒御地出張中はご多忙のなか、漁具その他の説明を煩わし生徒も満足致しおり候」と、伝習所生が世話になったことを感謝して、お礼に水産動植物図を贈ると書いてある。

小谷家の居間に飾られてきた「日本重要水産動植物之図」3枚は、関沢の贈ったものと分かり、図が入っていた木箱も出てきた。



関沢明清から小谷喜録に届いた手紙

青木繁も見た？動植物図贈る

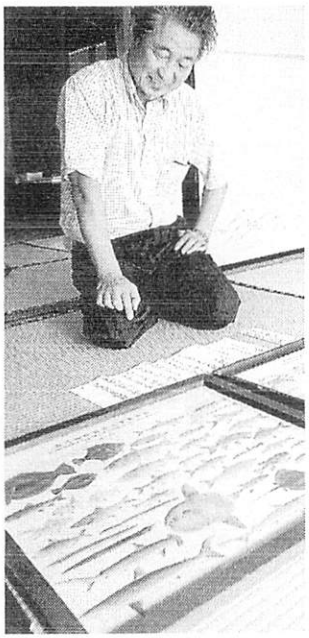
動植物図は、タテ50センチ、横65センチほどの紙にマンボウやサメなど魚類83種、イセエビ、サザエなど甲殻類・貝類51種が描かれている。フランス革命100周年記念で1889年に開かれたパリ万博のため、農商務省水産局が作った日本初のカラー石版画で、題字の下にフランス語訳もある。

同じ図は金沢大付属図書館にも所蔵されている。海藻やアシカなどを収めた第4図もあるというが、小谷家では飾っていなかった。

当時の当主、小谷喜録は網元として人望も厚く、村議も務めた。水産伝習所の生徒に漁法などを教え、動植物図は額に入れて居間のなげしに飾られた。

スケッチ旅行に来た青木繁たちは、その居間で暮らした。青木は友人にあてた絵入りの手紙(1904年8月22日付)でクジラ、マグロ、フカ、イセエビなど40種類を列挙し、大作「海の幸」に取り組んでいることを示唆した。喜録から3代目の福哲さんは「青木繁たちも水産動植物図を見ているはず。この図をヒントに魚を覚えたのかもしれません」と語る。

動植物之図や関沢の書簡は21日、旧館山市立富崎小学校で開く「青木繁『海の幸』フェスタ」に展示される。入場無料。問い合わせは事務局(0470・22・8271)へ。(清水弟)



額に入った「日本重要水産動植物之図」を見る小谷福哲さん

関沢明清

(1843〜1897)

(東京海洋大提供)

金沢藩士の次男に生まれ、蘭学(らんがく)を学び、藩命で英国留学。明治政府の事務官となってウィーン万博やフィラデルフィア万博を視察し、サケ養殖や放流技術、缶詰め製法などを導入した。水産伝習所(東京海洋大の前身)の初代所長を務めた。晩年は館山に移住、経営者として捕鯨や遠洋マグロ漁に従事した。